聖剣の軌跡

空風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖剣の軌跡

【Ｎコード】

Ｎ８７５４Ｘ

【作者名】

空風

【あらすじ】

２０４５年、マクロスが落下しなかった世界の日本。凄まじく科学が発展した世の中で１機のＶＦが技術検証（己のロマンを満たす）のため開発される。しかし、テスト中の事故で機体ごとマクロスＦの世界に行ってしまう。彼らは元の世界に帰れるのか？

プロローグ（前書き）

警告
処女作です
文才皆無です
二次創作です
おそらくは亀更新です

それでも良い方は、どうか作者の妄想にお付き合い下さい

プロローグ

後席に座っている綾夏（アヤカ）・・・おっと、今は天川（アマガワ）三尉だ・・・に指示を出す

「三尉、ディスプレイ上で機体の状況を確認した後、機上セルフテストプログラムを起動し、全項目をチェックしてくれ」

「了解」

いつもの明るい声ではなく、固い声が返ってくる。もっとも、オレの指示も緊張でがちがちだっただろうけど

そんなどうでもいい思考を頭の隅にやり、この機体のＡＩにも指示を出す

「ＡＲＩＥＬ（アリエル）、空間跳躍システムに入力予定のデータに誤りがないか確認」

「了解」

ＡＲＩＥＬから返答がある

音声入力に対して、前面の複合ディスプレイに文字を表示すると言う方法でだが

ちなみに、ＡＲＩＥＬというのはシステムの名称であり、この機体のこのＡＩのみを指す名称じゃない

この機体、「ＶＦＡ－１９Ａ改」はアニメ、「マクロス」シリーズにある機体「ＶＦＡ－１９Ａアサルトカリバー」を２０４５年現在における日本最高の技術で作り上げた物だ

古いアニメだけど、親父の影響ですっかりマクロスにハマった上、大学時代には「可変戦闘機同好会」なるものまでつくってしまった

しかも、その時の同期メンバーは、そっくりそのまま同じ会社に就職し、こんな機体を造っている

まさかその会社に親父がいて、「可変戦闘機開発研究課」

なるものの副課長をしていると知った時は、驚くと同時に呆れたけど

そして今は、新型の推進機関、「空間跳躍機関」

の最終テスト中だ

「二尉、機上セルフテストプログラムの全項目が終了。異常ありません」

天川三尉の声で逸れていた思考を集中しきれてない、と思いつつ戻す。

死にたくなければ集中しろ。試験飛行とは言え、今回のは何が起こるか分からない

そう言い聞かせながら「了解」と返す

ピリッ

軽い電子音が響き、ディスプレイ上に文字が表れる

［データの確認終了。問題なし］

それを見て、オレはこの機体を観測中の早期警戒機に通信を入れる

「Ｔ－１０１（ティーヒトマルイチ）ハヤブサよりイーグルアイ。機体及びシステムに問題なし。試験に支障ありません」

《こちらスカイアイ、了解。》

《小松管制塔、滝沢三佐よりＴ－１０１。必ず生きて帰って来い。これは命令だ》

「ハヤブサ了解。生きて帰ってきます。絶対に」

我らが第１試験飛行隊の上官、滝沢三佐はやっぱり部下思いの人だ

《スカイアイよりハヤブサへ。これより第３７次飛行試験を開始します。貴機の幸運を祈ります》

「Ｔ－１０１、ハヤブサ、試験を開始します」

そう言って、オレ達は準備を行う

「アヤ、シュミレーション通り、３カウント後だ」

「分かってますよ、機長」

大丈夫、大丈夫だと言い聞かせながら、操作を続ける

「モード変更、空間跳躍モード。特殊推進機関起動」

「特殊推進機関の起動を確認」

マニュアル通り、ひとつひとつを声に出して確かめていく

大丈夫だ。何たってオレの後ろには「天川綾夏」（オレの女神殿）がいるからな

「全システムオールグリーン。機長、カウントどうぞ。」

ふうっ、と軽く深呼吸

「了解・・・・・・空間跳躍システム始動・・・・・・3、2、1、ナウ」

その瞬間、閃光と衝撃により、オレ達は意識を刈り取られた

プロローグ（後書き）

誤字脱字やアドバイス、その他お気づきの点のご指摘お願いします

機体解説

・ＶＦＡ－１９Ａ改

マクロスプラスなどで登場し、正式採用された「ＶＦ－１９Ａ　エクスカリバー」の派生型「ＶＦＡ－１９Ａ　アサルトカリバー」という機体を現代日本の最高技術をもってして生産した物

マクロス落下がなかった世界で造られたので、外見上の違いは設定通りであまり違いが無いが、中身にはいくつかの違いがある

ちなみに、設計士やパイロットは口を揃えて「男の夢を詰め込んだ物」と言う

機関

熱核エンジン×２（脚部）

原作よりも低出力

腰部スラスターユニット×２

新型推進機関が収められている。空間跳躍に用いられるがスラスターとしても使用可能。主翼の付け根の上に配置される（ガンダム試作３号機の腰にあるスラスターを小型にしたイメージ）武器コンテナにもなっている

ピンポイントバリアが無い代わりにビームシールド×２（左腕シールドと右腕肘）

武装

５５ミリガンポッド×１
腰部半固定レーザー機銃×２
頭部後方用レーザー機銃×１
機首レーザー機銃×２
マイクロミサイル

腰部電磁投射砲（ＥＭＬ）×２（腰部スラスターユニットに内蔵）
機関直結式ビーム砲（ＥＭＬの横に配置）
近接ブレード×２（同じく腰部スラスターユニットに）
プラズマソード×２（近接ブレード横）
ビームカービン×１（右脚部ＦＡＳＴパック内）
ビームカービン用予備Ｅパック×６
空間跳躍用高機動ソードビット×８
もともとは、空間跳躍用のゲートを支える端末だったが、武器としても使用可能。ＡＲＩＥＬとＦＣＳにより射出から後は全自動で制御される。

機体色は白地に青と空色のライン。キャノピー後部とシールド部に青で「ＡＲＩＥＬ　ｓｙｓｔｅｍ」と風の妖精、シルフが書かれている

機体解説（後書き）

感想、アドバイス、質問などお待ちしています

第1話

「・・・・・・ン・・・・・・・・」

なんだ？

「起きてよ・・・・・・」

ぼんやりとした、まるでまどろみの中に居るような・・・・・・

「起きてよ、ジュン兄さ～～～～ん！！！」

「うんわぁっ」

叫び声によってオレの意識はまどろみの空間から強制的に引きずり出された。

「隼兄（ジュン）さん大丈夫！？」

「取り敢えず生きてるよ・・・・・・それより此処は？」

「さあ？分からないわ」

「分からないって、そりゃまずいって」

目をやったキャノピーの外に広がるのは、夜空じゃなく、

「・・・・・・宇宙？」

暗黒の真空空間だ・・・・・・まじすか？

「ＡＲＩＥＬ、機体状況は？」

［空間跳躍機関の本体がオーバーヒートにより大破、ゲート構成用端末８機の内２機が行方不明。それ以外は全て正常です］」

「本体なしじゃ、再跳躍は無理だな・・・・・・アヤ、通信は？」

「全チャンネル、全通信方法を使っているけど、応答無しね」

「チクショウ、どうする？」

自機の位置が特定出来ないと迂闊に行動するわけにはいかない。幸い、エアーも宇宙用の推進剤も、非常事態に備え、満タンになっている。

だからといって、永遠に有るわけではないし・・・・・・。

《――――ガガッ――》

開きっぱなしだった通信回線から声らしきものがながれる。

《エコー１からギリアム・アングレート！現在、敵増援と交戦中！至急援護を出してくれ！数が多すぎる！》

「どうする？」

綾が聞いてくる。

「取り敢えず、情報収集、だな・・・・・・。三尉、これより戦術情報偵察を行う。サポートしてくれ。」

「了解」

「ＡＲＩＥＬ、戦術偵察モード」

［ラージャ―］

オレは操縦桿とスロットルレバーを握り、戦闘宙域に機体を進める。

複合ディスプレイ上のレーダーには所属不明意味するを黄色のグリップが３０近く輝いていている。

機体に備えられたカメラがその未確認機を捕らえ、キャノピーに拡大して映し出す。

「こいつは・・・・・・」

「ねぇジュン、あれってもしかして？」

「もしかしなくともサンダーボルトとエクスカリバーだろうよ・・・・・」

その宙域ではタイプまでは分からないが、空色のＶＦ－１９と赤のＶＦ－１１がミサイル合戦を演じていた。

１９には新統合軍の識別マークがあるが、１１には無い。正規軍と海賊かなにかかだろうか？

ヴィーー

突然、耳障りな音と共にキャノピーの表示が赤く染まる。

敵の照準波を感知、つまりロックオンされた。

「くそっ、撃ってきた！？」

毒づきながら、スロットルをミリタリー（アフターバーナーなしでの最高出力）に叩き込む。

「ブレイク、スターボート、ナウ」

アヤからの指示に従い、素早く右に旋回。

同時にチャフとフレアを射出する。

先程までいた空間を5発ほどの赤いミサイルがそれに引っ掛かり、近接信管が作動し爆発した。

「三尉、ＥＣＭ開始。回避に専念するぞ！」

「りょ、了解！」

フライトオフィサであるアヤに指示を出す。

初めての実戦。

足が震えているのがわかる。

落ち着け、別に殺さなくとも、逃げつづければいい。
死にたくなければ降りかかる火の粉を払い続けるだけで良い。
「武装マスターアーム、オン。全武装安全装置解除」
震える声を押し殺す。アヤも怖いんだ、なら、兄貴がしっかりしろ！
複合ディスプレイ上に機体と武装のシンボルと共にに使用可能な兵装一覧が表示される
「RDY（レディ）｜GUN　POD
RDY｜LASER　GUN
RDY｜EML
RDY｜BEAM　LAUNCHER
RDY｜BEAM　CARBIN
RDY｜SWORD
RDY｜PLASMA　SWORD」
エンジンも問題なし。大丈夫だ
「ブレイク、ポート」

左に旋回する

ガンポッドの銃弾をともなって突っ込んでくるのは、ファイターのＶＦ－１１

ＶＦ－１９の優れた旋回性能で素早くループ、そのまま背面飛行で逃げる。

「こっちは敵じゃあないってのに！」

心の中では神様に怒りをぶつけつつ、最大出力で逃げ続ける。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

どれだけ経っただろうか？

集中力は限界だった

そんな時、国際救難チャンネルで通信が入った

《あー、そこの所属不明のＶＦ－１９に告ぐ。こちらは新統合軍所属のウラガ級空母、ギリアム・アングレートである。貴機の所属を述べ、こちらに帰順せよ。繰り返す。こちらは・・・・・・》

「だ、そうだけど？どう答えるの？」

「模範解答が欲しいな・・・・・。まあ、バルキリーやらウラガ

級やらある時点でマクロスの世界だって確定したし、ギリアム・アングレートといったら特殊部隊だし」うん、神様の悪意を感じるよ。

「本当の事言ってみる？それしか思い付かない」

「じゃ、機長どの、よろしく頼みます！」

「やっぱ、そうなるよね・・・・・・」

「えー、こちらは日本国航空自衛隊、第１試験飛行隊所属の試験機、コードネーム『ＶＦＡ－１９Ａ改』パイロット、天川隼二等空尉とフライトオフィサの天川綾夏三等空尉であります」

「《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》」

《・・・・・・は？》

しばらくの沈黙の後、返って来たのは素っ頓狂なものだった。

第1話（後書き）

感想、ご指摘、その他諸々、お願いします。

１１月５日修正

浦賀級→ウラガ級

第2話（前書き）

短いですがお許しを。

第2話

「で、お前達は異世界の人間だと？」

あの後、空色のＶＦ－１９にエスコート、もとい、連行され、ウラガ級空母、ギリアム・アングレートに拉致られた俺達兄弟は、狭い部屋でゴツい兄貴と１対１という、精神衛生によろしく無い状態で絶賛尋問中でございます。

「なあ、いい加減全部吐いちまえよ」

オレの尋問官であるスティーブン・ダンカンは疲れた様子で言ってくる。

「だから、本当の事ですってば」

この問答も何回目だか。いい加減疲れてきました。

そこに東洋系の女性が入って来る。

「ダンカン大尉、引き継ぎます」

「ああ、ご苦労さん。任せるよ」

「分かりました」

尋問官交代か。こっちも休憩が欲しい。

「はじめまして、ナカムラよ」

「あっどうも、天川です」

軽く会釈する。・・・・・・ナカムラってことは、日本人か？もしそうなら、なんとかなる・・・・・・か？

「じゃあー、貴方の所属を聞かせて貰います」

「日本国航空自衛隊、第１試験飛行隊、１番機、開発コードネーム『ＶＦＡ－１９Ａ改アサルトカリバー改』テストパイロット、天川隼二等空尉であります」

「あの機体はどこで？」

「三菱重工を中心として、国内企業からの選抜者によって作られた極秘のプロジェクトチームによって開発されました」

「何故、あの機体が作られたのかしら？」

「前進翼の性質調査、新素材の耐久試験、エンジンのテスト、などなど。後は、バルキリーへのロマンです。まあ本音を言えば、９割９分９厘がロマンや憧れ。残りの１厘以下が新技術ってとこです。」

「この宙域にはどうして？」

「空間跳躍機関のテスト中に、急に。原因不明です」

「はぁ、これは予想以上ね・・・・・・」

こっちがため息つきたい気分だ・・・・・・。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

あれから似たような無限ループを繰り返してます。無限ループって怖くね？

ドアがノックされ、誰か入って来る。

「中尉、彼に手錠と目隠しを」

入ってきたダンカン大尉が指示する。

え、ちょっとまて！手錠＋目隠し＝銃殺しか考えつかないんですけど！？

内心、目茶苦茶パニクり、ビビっているオレに構うことなくその二つのアイテムが着けられ、どこかへ歩かせられる事となった。

第2話（後書き）

感想、アドバイス、ご指摘などお待ちしております。

第3話（前書き）

おもしろく無いかもしれませんが、第3話をお楽しみ下さい。

第３話

「うぉ～～～」

目隠しを外されてから、一番に口をついて出たのは、感嘆の声。

連れて行かれた馬鹿でかい格納庫には、ＶＦ－１９がずらり。

「これは、壮観だな・・・・・。」

「見とれるのも良いが、とっとと来い。」

背中を押すのは止めてください。手錠着けられるんで、コケそうになりますから。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「で、どうしろと？」

「こいつに掛かったロックを解除しろ」

オレ達のＶＦＡ－１９Ａ改には機体に生体認証によるプロテクトが掛かっている。登録されているオレ、アヤ、滝沢三佐、整備士の皆さん以外では、中枢コンピュータが起動しない。無理矢理起動させようとすると、警告メッセージが出て、それでも起動を続ければ、自爆シークエンスが起動し、自爆するようになっている。

最も、生体認証以外にもセキュリティは有るわけだけど。

「別に構いませんけど、いくつか条件があります。」

「ほう、貴様自分の立場を理解しているのか？」

「ええ、もちろん。この状態からでも、機体の自爆シークエンスは起動出来ますし」

「・・・・・はったりだろう？」

「でも、あなた方には確かめる方法がありませんよ？」

これは本当の事で、音声認識で指示すれば一発ドカンってなる。

「・・・・・とりあえず、条件はなんだ？」

「一つ目は、天川三等空尉をここへ呼ぶこと。二つ目は、いきなり殺さないこと。三つ目は、この空母の司令官と話をすること。この三つだ。」

「しばらく待て」

そう言って、ダンカン大尉はどこかへ行ってしまう。恐らく、上官に指示を仰いでいるのだろう。

さて、どうなるか・・・・・。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

しばらくすると、ダンカン大尉とアヤが歩いてきた。

「司令がいらっしゃる」

そう一言行って大尉は黙りこんでしまった。

向こうから、一人の男が来る。軍服の上から見ても分かる、がっしりとした体つき。この距離からでも感じる威圧感。間違いなく猛者だろう。

その男がオレとアヤの前に立つ。

「「・・・・・・」」

互いに無言。

ええい、ちくしょう。喋りゃ良いんだろ！

「お、お初にお目にかかります！航空自衛隊、第1試験飛行隊所属、天川隼二等空尉と、同じく天川綾夏三等空尉であります！」

恐れを払拭するために、噛み付くように言う。

「用件はなんだ？」

「初対面の人と話す時は、まず自己紹介からじゃないでしょうか？エイジス・フォッカー大佐」

相手の表情が変わる。張り詰めたものから、より張り詰めたものに。

ついでに威圧感も三倍ぐらいになってます。赤くて角つきですか？

とにかく、ここでありとあらゆる情報を叩き付け、なんとか信じて貰うしかない！

「特務部隊、ＶＦ－Ｘレイブンズ。指揮官はエイジス・フォッカー大佐。母艦はウラガ級空母、ギリアム・アングレート。ちなみに、この名前は前隊長である、ギリアム・アングレート大佐から取られている。アングレート大佐は、ラクテンスの野望を止める為戦ったが撃墜。その後、マクロス１３に搭載されたジャミングシステムを停止させたんですよね。」

「お前、どこまで知っている？」

「言いましたよね、異世界人だって」

「・・・・・・」

もう一押しか？

「兄さん、機体の情報ファイルを見てもらえば？」

アヤが提案してくる

「フォッカー大佐、今から機体のロック外しますんで、確かめて見てください。たぶん、あの機体自体が１番の証拠になります」

「なら、早く解除しろ」

「了解。ＡＲＩＥＬ、音声認証モード。機体の全ロックを解除し、

情報を開示しろ。・・・・・・これで良いはずですよ」

「整備班、あの機体から情報を吸い上げろ」

隅にいた整備士達が駆けていく。

そして聞こえてくるのは、情報機器の規格が合わず、悪戦苦闘する声。

根本から技術が違う訳ね・・・・・・。どうしたものか・・・・・・。

第3話（後書き）

感想、ご指摘などお待ちしております。

第４話（前書き）

遅れてすみません。第４話です。

第４話

結論から言うと、アサルトカリバー改の機上でデータを見せる事になった。

戦闘機動研究のために保存してあったマクロスシリーズやらガンダムシリーズやら戦闘妖精雪風やらの中からマクロスシリーズを選び見せたのだ。

もちろん、フロンティアは抜いたが。

素晴らしき我等が日本文化、万歳。

約６時間後。
俺達はＶＦＡ－１９Ａ改機上にいた。

事情を理解した（せざるを得なかった）フォッカー大佐からが「マクロス・フロンティア船団に行け。恩師と後輩に面倒見てもらう」と言ったためだ。

「恩師はワイルダーさんで、後輩はオズマさんのことだよね？」

「多分、それであってる。オレの記憶が正しければだけど」

そんな会話をしながら、空間跳躍機関のセッティングをする。まあ、難しいところはＡＲＩＥＬがやってくれるけど、オレ達は主にそれのチェックだ。

「でも、フォールドブースター借りられなかったのは残念だったよねー」

「軍の備品って言われたら仕方ないさ」

今回も空間跳躍機関を使う。前回のテストでオレ達を、この世界に吹き飛ばしたヤツだ。

あの後、２人とＡＲＩＥＬでプログラムを三回チェックしたが、エラーは見つからなかった。

もし今回もどこかへぶっ飛ばされたら、跳躍機関そのものに欠陥が有ることになる。

分かったところでどうしようもないが。

更に不安要素を挙げるとすれば、跳躍時のゲートを形成する端末が８個中６個しか無い事と、フォールド断層だ。

端末は最悪、４個以上の状態なら正常に機能するように設計してあるけど、できれば万全の状態でしたかった。

フォールド断層はオレ達にとって未知の物だ。
何が起こるか分かる訳が無い。

「それでも行くしか無い、か」

「何か言った？」

「いや、独り言だ」

後ろに乗ってる妹を守れるのは自分だけだと自覚しろ。弱気になるな。

「準備は？」

「大丈夫です」

［ＥＶＥＲＹＴＨＩＮＧ　ＲＤＹ－ＯＫ］

「なら、行くぞ」

一言呟いて、スロットルを叩き込む。青く輝く光の輪の向こう、目指すはマクロス・フロンティア船団。

†††††††††††††††

目の前にあるのはこの世界で最大級の人口物だろう、超長距離移民船団。

「やっぱ、アニメとは違うな・・・・・・」

「何当たり前の事言ってるの？」

「いや、なんかこう、迫ってくる威圧感？みたいのを感じるわけよ」

どうやら妹はオレほどは動揺してないみたいだ。

《こちらは、第５５次超長距離移民船団マクロス・フロンティア。貴機の所属を通達されたし。》

これについての返答は、フォッカー大佐から聞いてある。

「えーっと、こちらは民間軍事プロバイダー、ＳＭＳ所属の機体です。マクロス・クォーターに着艦予定。パイロットは天川隼。新統合軍ウラガ級空母、ギリアム・アングレートからのデータが有るはずです、照会願います。」

《現在照会中・・・・・・。照会完了、確認しました。船団宙域への進入を許可します》

「了解、感謝します」

「言っちまったな」

「言っちゃったね」

もちろん、ＳＭＳに所属している訳が無い。ただ、フォッカー大佐からフォールド通信で大まかな事情は説明済みのはずだから、安心して名を出せた訳だ。

そうこうしている内に、クォーターが見えてくる。

「三尉、クォーターとの通信回線開け」

「了解。・・・・・・回線開きました、機長どうぞ。」

「こちらは、新統合軍所属のウラガ級空母、ギリアム・アングレートから来た天川隼だ。着艦許可願う。」

《こちらクォーター、エスコートにＶＦ－２５を出します。しばらく現宙域で待機して下さい》

「了解、待機します」

そしてクォーターから上がって来たのは、グレーに黄色のラインが入ったＶＦ－２５、スカルマークつき。

《ＳＭＳ、スカル小隊リーダー、オズマ・リー大尉だ。貴機をエスコートする。ついて来い。》

「了解」

一言答え、オズマ機について行く。ギアダウン、フラップダウン、迎え角、速度ともによし。

弾まないように慎重に機体を下ろす。そのかいあってか、上手く着艦に成功した。スポッティングドーリーが機体の前輪を固定し、エレベーターまで運ばれた。

格納庫に機体が収められてから、すぐに医務室に連れて行かれた。なんでも検疫を行うのだとか。

結果は直ぐに分かり、問題は無かったので、今度はブリッジに連れて行かれる事になった。

今更だけど、精神的にも肉体的にも疲れ果ててるんですけど。

ブリッジに案内された俺達の前に居たのは、ワイルダー艦長、モニカさん、ミーナさん、ラムさんの四人だった。

「この艦の艦長をしているジェフリー・ワイルダーだ。君達の事は聞いている。」

「お初にお目にかかります、天川隼です」

「天川綾夏です」

「しかし、本当なのか？詳しく聞きたいのだが」

この問いはもしかしなくとも、オレ達に起こった出来事についてだろう。

「その前に、ここに目と耳があれば、覆って戴けますか？」

「良いだろう。ミーナ君。」

「はい、艦長」

ミーナさんはたしか、艦内ステータス管理だったはずだ。

「これで大丈夫だ。話してくれるかね？」

僅かに首を動かして頷いたあと、軽く深呼吸をひとつ。

よし！

「改めてはじめまして、異世界の皆さん」

オレはその、中二病全開的な台詞を放った。

第４話（後書き）

感想、誤字脱字の報告、アドバイス等、お待ちしております。

一言愚痴るなら、定期考査なんて消えてしまえ。

人物解説（前書き）

試験期間中だってのに僕はなにしてるんでしょうか・・・・・・。

人物解説

・天川　隼　（あまかわ　じゅん）

本作の主人公。

基本優しいが、一度感情の抑えが弾けると恐ろしい。

妹である綾夏には基本逆らえない。（腕力的にも）

大学卒業後、重工業メーカーに就職。

可変戦闘機研究開発課に所属。

開発に関わっていた事と、大学時代に取得したグライダー免許に目を付けられ、新技術を大量投入した試作可変戦闘機（ＶＦＡ－１９Ａ改）のテストパイロットを勤める事となる。

テストパイロットとして航空自衛隊第１試験飛行隊に出向。階級は二等空尉。コールサインはＴ－１０１（ティーイチマルイチ）もしくはＴ－１（ティーワン）。

追加武装パーツ兼、スラスター兼、空間跳躍機関のテスト中に意識を失い、マクロスの世界に飛ばされた。

戦闘機乗りとしては才能があったようで、大気圏内、ファイター限定ならオズマ大尉と一対一で張り合える。反面、バトロイドやガウォークでの操縦レベルは素人に毛が生えた程度である。

ただ、かつて剣道をやっていた為か、反射神経や体捌きは良いため、バトロイドでの近接戦闘（ＥＸ－ギアつき）であれば、オズマ大尉をも圧倒する事がある。

なお、本人は気付いていないが、体が高校２年のレベルにまで戻っている。

・天川　綾夏　（あまかわ　あやか）

隼の妹。

高校卒業後、防衛大学校へ進学。卒業後ＡＷＡＣＳであるＥ－７６７に配属される。

高い情報処理能力をかわれ、可変戦闘機のフライトオフィサとなる。

電子戦の訓練も積んでおり、ＶＦＡ－１９Ａ改自体の高いスペックと相まって、演習では負け無しである。

鬱陶しいとの理由で髪は常にショート。

防衛大学校出身のため、生身での戦闘能力も高い。

彼女もまた気付いていないが、体が高校１年時に戻っている。

・ＡＲＩＥＬ　（アリエル）

エアリアル、エリアルとも呼ばれる。マクロスの世界では、システム名として存在し、ＶＦ－１９にはＡＲＩＥＬ、ＶＦ－２５にはＡ

ＲＩＥＬ－？が採用されている。

ＶＦＡ－１９Ａ改に積まれた物はまだ教育段階にある物だが、某戦闘機ＯＶＡ等から戦闘機動を学習しているため、オリジナルに劣らない機動を見せる。

普段は中枢コンピュータとして働き、３機あるフライトコンピュータ、火器管制システムの監視や、機体そのものの監視を行っている。

複合ディスプレイ上に文字を表示することでパイロットとはある程度の意志疎通が可能。また、パイロットからの音声入力にも対応している。

なお、オートマニューバスイッチが入った場合はＡＲＩＥＬに、機体の全権が委ねられる。

人物解説（後書き）

感想、アドバイス等お待ちしております。

鋼殻のレギオスの二次創作も始めたので、よかったらそちらもどうぞ。

第5話（前書き）

遅くなってしまいました。

相変わらず短いですが、楽しんで下さい。

第5話

一通り、身の上話が終わった後、ワイルダー艦長が質問してきた。

「君はこれからどうするつもりかね？」

「ＳＭＳに雇っていただけないでしょうか？正直言ってパイロットとしての腕は低いですけど、少しでも『力』を役に立てたいんです・・・・・来るべき戦いのために」

「！そこまで知っているのか・・・・・・分かった、君達二人をＳＭＳに迎えよう」

「「ありがとうございます」」

「今日は疲れただろう。宿舎で休んでくれ。詳しい事は明日話そう」

「「分かりました」」

「モニカ君、二人を案内してやってくれ。」

「了解しました。じゃ、二人ともついて来て」

オレ達はモニカさん、もといモニカ曹長の後をついていった。

††††††††††††††

翌日、朝からＳ．Ｍ．Ｓの空き部屋で綾と二人で膨大な書類の山（注・隼の誇張表現です）に対しボールペン一本で立ち向かっていた。内訳は、Ｓ．Ｍ．Ｓに入社するための宣誓書や契約書等などだ。

「・・・・・・終わっ、た・・・・・・」

内容にもれが無いことを確認してもらい、ＯＫサインが出たのは昼前だった。・・・・・・我、昼食を所望す。

時間的には少し早いけど、食堂が空いているだろう、との事で飯を食べていた。

「お前があれのパイロットか。」

その声に顔を上げると、Ｓ．Ｍ．Ｓの制服に身を包んだオズマ大尉

が食事のトレイを持っていた。

「横、失礼するぞ」

「あっ、どうぞ。ところで、どちら様でしょうか？」

初対面の振りをしなければ、ね。

「ああ、自己紹介がまだだったな。昨日お前達をエスコートしたＶＦ－２５のパイロット、オズマ・リー大尉だ」

「天川隼です」

「天川綾夏です。昨日はありがとうございました」

「たいした事じゃない。それより、パイロットはどっちだ？」

・・・・・・オズマ大尉の目がすんごくギラギラしてるけど、嫌な予感しかしない。

「オレです」

「お前がか・・・・・・」

あの、無駄に意味深な沈黙止めてもらえますか？後、無表情を装ってるんでしょうけど、口角がニヤッ、と釣り上がってますから！

何故か冷や汗と震えが止まらない。オレの中のなにかが、全力で警報を鳴らしている。

「天川、午後のシュミレータ訓練だが・・・・・・オレが相手だ。むろん、負けたらペナルティーな」

それを聞いて、オレは食べかけのトウモロコシパンにむせた。

「うわっ、兄さん汚い！」

「すまねぇ・・・・・・」

チキンブロスを飲んで落ち着いた後、吹き出したパンくづを回収。

ちっ、アヤのやつ人事だと思って・・・・・・。

「そのあと、天川妹の方もな」

「えっ？」

意外に世の中は平等だった

「でっ、でもあたし、電子戦担当だし・・・・・・」

「万一の事もあるだろう。決定事項だ」

「そんなぁ・・・・・・」

こうして午後のシュミレータ訓練に突入したんだ。

†††††††††††††††††††††

今回のシュミレータは複雑だ。生態認証を行った状態でシュミレータに繋ぎ、基本的な演算をシュミレータ側で、戦闘機動の演算はＡＲＩＥＬ側でやる。

規格の問題はルカが一晩で解決してしまったらしい。・・・・・・・
ルカの方がよっぽど規格外だろ。

で、今オレはシュミレータ内にいる訳だ。

「初回はお前の希望の環境でやる。好きなやつを選べ」

「じゃ、これで」

迷う事無く選んだのは、「地球型惑星、１G、大気圏内限定、ファイター限定」。

「えらく限定的だな」

「これ以外じゃ開始1分で負けそうなんで」

カウントが零に近づいていく。

3――

2――

1—

「さあ、行くぞ」

スロットルをアフターバーナーに叩き込んだ。

†††††††††††††††

恐らく、オズマ大尉はアクティブステルスを使ってくるだろう。そうなると理論しか完成せず、実装されてないこちらが不利だ。

「フローズンアイ起動、空間受動レーダー作動。」

知る人ぞ知る、大気圏内戦闘での秘密兵器、空間受動レーダーを使う。どんな方法で隠れようとも、大気を押し退けて動く限りは見つける事が出来る優れ物だ。

レーダーに感あり、方位1ー8ー0、距離6500、速度5．8。ちょうど12時方向、ヘッドオンだ。

自動迎撃モードもあるけど、今回は使わない。

武装一覧からＥＭＬ、レールガンを選択して引き金を引く。

「Ｔ－１０１、スラッシュ」

２発撃ったけど回避された。

そのまますれ違う。

直ぐに急旋回して後ろを取りに行く。

格闘戦ならこっちに分がある。

ケツにつき、ガンアタック。

回避されても食らいつく。

そんな攻防が続くけど、ここで決める。

突然、オズマ機の機首が持ち上がった。コブラか？

「なっ！」

コブラから一気に機体が縦回転、後ろを取られた。

「Gリミッター解除！」

そう叫んで、推力変更ノズルを動かす。本来なら動かないはずの横方向へ。

機体が水平にコマの様に回転し、後ろ向きになる。激しいGに堪えながら、ありったけの火力、レールガンとレーザー、ガンポッドを叩き込む。

その瞬間、撃墜の判定が下った。

2機同時に。

第5話（後書き）

地の文が安定しません・・・・・。次回からは最も気をつけます。

感想、アドバイス等お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8754x/

聖剣の軌跡

2011年12月11日14時47分発行